

五月の刑人稲籾



稲籾

文楽座

長谷川

五月の人の形浄瑠璃

——演出總形人・線味三・夫太——

(夜の部)

壺坂観音靈驗記

壺澤坂市寺内の段

帝國藝術院賞受賞記念上演
父は唐土母は日本
國性爺合戦

獅子門城の段

増補大江山

尻り橋の段

(晝の部)

本朝廿四孝

十種香の段

義經千本櫻

釣瓶壽し屋の段

傾城反魂香

吃又平名筆の段

★十三日より晝夜の狂言入替上演致します★

昭和十九年四月廿九日初日

(五月二十五日まで)

初日 晝十一時・夜四時二部
毎日 晝十二時・夜五時 開演

●一部料金●

一等席 四圓九十錢

二等席 二圓四十錢

三等席 八 十 錢

(各等入場税共)

一等御座席は五日前より
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符専用電話

南 ④ 四七一 一番

一般御用の電話

南 ⑤ 三〇三 二番
三七八 八番



十種香の段

狐火の段

娘八重垣姫
武田勝頼
腰元濡衣
長尾謙信
白須賀六郎
原小文治

鶴野澤寛弘	豊澤松之輔	竹本仙太夫	竹本雛太夫	源太夫	野澤喜左衛門郎	竹本雛太夫	竹本源太夫	竹本津磨太夫	豊竹司太夫	竹本叶太夫	竹本演太夫	竹本伊達太夫	竹本南太夫
-------	-------	-------	-------	-----	---------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	-------

★晝の部 (十三日より夜の部)

本朝廿四孝

十種香の段より
狐火の段まで

明和三年正月(二四二六)竹本座初演。作者には近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出、竹田平七、竹本三郎兵衛等が名を列れ、全五段に分れ、殊に、第四の切「十種香の段」が名高い。所謂甲越の戦を題材とした大近松作「信州川中島合戦」(享保六年八月—二三八—)竹本座初演)に基き技巧を凝らしたもので、武田、上杉両家の確執に足利將軍を殺した齋藤道三の謀判を取合せた作。

梗概

武田、上杉両家は諏訪法性の兜の事から確執して居りましたが、將軍義晴の身に變事があつた爲三年間合戦を止めて其間に曲者を探す事、若しその出来ぬ時は両家は互に一子勝頼、景勝の首を打つて渡

人形役割割

十種香の段

娘	八重垣姫	桐竹紋十郎
武田	勝頼	吉田榮三郎
腰元	濡衣	桐竹紋司
長尾	謙信	吉田玉徳
白須賀	六郎	吉田多三郎
原	小文治	吉田玉男
娘	八重垣姫	桐竹紋十郎

狐火の段

す事を誓ひ三年間は無爲に過ぎました。

此所に信玄の息勝頼ですが、彼は奸臣板倉兵部の爲に幼時より民間に育つて花作り箕作と呼ばれ瓜二つの兵部の子が勝頼と名乗つてゐました爲に幸に偽の勝頼が切腹し、其首が渡されたのでした。然して此所長尾館に仕へる腰元で此の偽の勝頼と戀仲の濡衣は、將軍義晴を狙撃した齋藤道三の娘で、父の意をうけて武田上杉を亡さんとしてゐたのですが、戀人の死に會つて翻然、武田家の爲に上杉家から法性の兜を取り返そうと、腰元となつてゐるのでした。箕作の勝頼も亦曲者詮議と幼君の守護法性の兜取戻しの爲に、花造りとなつて此の館に入りこんでゐるのでした。又上杉家の息女八重垣姫は、かねて武田勝頼とは兩家和解の爲に許婚の仲で有りましたが、偽の勝頼の切腹を、一圖に眞の勝頼が切腹したものと思ひこみ、其繪姿に向つて、絶へ果てた縁を歎き悲しむのでした。

劇は此所から始ります。



姫のかうした様を見た勝頼の箕作は、そごろ不整の念に涙するのですが、濡衣は勝頼の姿が、我が亡き戀人と瓜二つの容姿に、思はず胸とどろかせるのでした。そして似たとは愚か、矢張り其まゝと、其足下に泣き伏す聲に、姫も襖の隙から窺へば、正しく繪姿其まゝの人が其所に居て、濡衣と言葉交して居りますので、姫は改めて濡衣に向ひ、若し此箕作が其方の知る邊でも、又殿御でもないならば、戀の媒介をと頼むのでした。濡衣はそれが眞實の戀ならば、仲介せまいものでもないがと、誓紙の代りに、法性の兜を盗み出して貰ひたいと云ひます。姫は兜を望むとは、扱は眞の勝頼様に違ひないと、箕作に縋つて嬉し涙にくれますが、箕作は、いつかな本心を明かさないのでした。爲に姫は、勝頼様でもない者に云ひ寄つたは辱しと、其場に自害して果てやうとしますので、此所に始めて眞實は明されたのでした。折柄謙信が現はれ、箕作を使ひに出すのでした。

釣瓶壽し屋の段



壽し桶

人形役割

娘 彌左衛門のお房里
 いがみの彌權太房
 下男彌左衛門盛助
 鮮屋彌左衛門侍
 若葉の彌左衛門侍
 六代内君
 梶原平三景時
 村原の善小歩
 女小歩
 悴房
 町人卷
 取人卷

桐	吉	吉	吉	吉	桐	桐	吉	吉	吉	桐	鶴	竹	鶴	豊
竹	田	田	田	田	竹	竹	田	田	田	竹	澤	本	澤	竹
紋	光	政	紋	光	光	玉	小	兵	十	兵	清	大	友	呂
助	造	龜	次	郎	龜	次	郎	德	郎	德	郎	輔	郎	郎
吉	助	吉	郎	吉	郎	吉	郎	吉	郎	吉	郎	吉	郎	吉
八	夫	門	夫	門	夫	門	夫	門	夫	門	夫	門	夫	門

義經千本櫻

釣瓶壽し屋の段

延享四年（二四〇七）十一月十六日初日で竹本座にて上演。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳。全五段からなり、二段目の渡海屋から大物ク浦、三段目の稚の木から小金吾討死、此の度上演の鮓屋、四段目の道行初音の旅から川連館まで等が殊に有名である。義經傳説中の堀川夜討、大物浦、吉野落等が骨子となつてゐるが、佐藤忠信を重用した上、壇の浦敗北後の平知盛（渡海屋銀平）、平維盛（鮓屋彌助）、能登守教經（横河覺範）等を把へて後日譚の形式に活かし、結果からみて義經の傳説そのものよりも忠信に關する部分を中心となり、又一貫してゐることも見られるが、そこに平家方を中心とした三種の挿話を夫々脚色性を保たしめつゝ有機的に巧みに統一し成功した淨曲中の名作である。

梗概

吉野路では名代の釣瓶鮓屋の彌左衛門の家には平

家の落人維盛卿が彌助と名をあらため世を忍ぶ身のその日を送つて居た。

彌左衛門の娘のお里は維盛の彌助に思ひを通はす様になり、彌助もお里にはその素性を明さず、何時かお里の婿になつて居た。

彌左衛門は維盛の父小松の内府重盛の恩になつた者で、その縁故から維盛の爲には少からず心を碎いてゐたのである。

彌左衛門は未だ歸つては來ない。その留守を覗つてやつて來たのは、いがみの權太だつた。

權太は如何にもしほしほとした様子で、昨夜大盜人に遇ひ代官所へ上げる年貢の銀三貫目を盜取られ、言譯けなくお仕置にあはうより遠くの國へ立ち退きます、と母親にかき口説いた。氣の弱い母親はうま／＼とこの權太のわなにひつ掛つてしまつた。

親爺どには内緒でと、權太に云ひ分だけの銀を出してやるのだ。何か入れ物と云つてよい思案もなし、店先に並べてある鮮桶の中へ銀を入れて持ち出

さうとした。そこへ丁度、あたふたと歸つて來た彌左衛門に出會ひ、銀は鮮桶に入れたまゝ、其處へ並べて知らぬ顔をして奥へ隠れてしまつた。

彌左衛門はあたりを見廻し、持つて歸つた小金吾の首を、そつと鮮桶の中へ入れて置いた。

夜も次第に更けて行つた。お里は寢仕度に氣もそは／＼して居る。これを見るにつけ彌助の維盛はこの初心のお里があはれでならなかつた。お里を先へ寝かせた維盛は、遙か都の空へ殘して來た若葉の内侍やわが子六代君をなつかしく思つたのであつた。

時にほと／＼と門の戸をおとなふ物音、それは女の聲で一夜の宿を、と云ふのだつた。斷りを云はんと門の扉を開けて見ると、月影にそれとまがひもなく若葉の内侍と六代君であつた。も早寢入つた様子のお里の寢息を窺つて維盛は内侍六代を家の中へ密かに通して、この不思議な親子夫婦の對面の所以を聞くのだつた。

若葉の内侍は、姿の變つた夫維盛の身なり貌に涙

した。維盛もお里と假りの契りを結んだのは、娘の戀路から大事の漏れるのを愁ひ、彌左衛門にも口止して我が身の上を明さず義理故詮なく今日に至つたと、譯を語り聞かせた。

傍にお里は何時か目を覺して、この物語の始終を聞いて居たのだつた。

お里はこらへかねてわつと泣き出し内侍若君をまづくと上座へ直した。

其處へ來たのは村の役人、此處へ梶原様が見えまする、と云ひ置いて歸つて行つた。

維盛も内侍若君も、さてはいよく運も盡きたかと覺悟をしたのであつたが、お里はさそくの機轉に親の隠居屋敷上市村へと逃がしたのであつた。

奥に様子を聞いて居たいがみの權太は、お觸れのあつた維盛夫婦六代君、捕へて褒美にありつかんと、止めるお里を蹴倒して、最前の銀を入れた鮮桶小脇に抱へ後を慕つて追つて行つた。

この一大事に彌左衛門もお里も母親もたゞ狼狽へ

るばかり、さう云ふ中にも梶原平三景時は矢筈の提灯も殿めしく、數多の家來に十手を持たせて入つて來た。

彌左衛門が維盛をかくまひ居ること訴人によつて明白、首打つて渡すか、但しは違背に及ぶか、返答如何に、と梶原は詰め寄つた。彌左衛門も腹を据え、隠しても隠されぬ故、既に維盛の首は打つてこの通りと、鮮桶を持つて出た。母親は最前權太が銀を入れて置いた鮮桶を出されては、と彌左衛門と云ひ争つて居る中、維盛夫婦餓鬼め迄いがみの權太が生捕つたりと、聲高らかに呼ばはり乍ら、若君内侍を猿縛りに維盛の首を携へて來るのだつた。梶原は大満悦で、褒美には親彌左衛門が命赦して呉れう。又頼朝公着用の陣羽織、鎌倉へ持ち來らば金銀と釣替へにする、と陣羽織と引替へに繩付きを受取つて悠々と歸つて行つた。

今まで耐へて居た彌左衛門は、憎し憎しと、隙をねらつて權太の脇腹を刀で刺し通した。權太はその

刃物を抑へて云つた。

こなたの力で維盛を助けることは叶はぬ。前髪
の首を彌助と云つて差出した所で、どうして梶原
ほどの侍が瞞されませう、と云ふのだ。彌左衛門は
最前の鉢桶を開いてみると中から出たのは銀三貫目
だつた。これはと驚き様子を問へば、さつき權太が
持つて行つた鉢桶を開いてみれば小金吾の首、これ
程までに心を碎く父親の心を察し、その前髪を剃り
落して差出したのであつた。

權太が苦しい息に取出す一文笛を吹けば、物蔭に
ひそんで居た維盛卿はじめ内侍六代君は、茶決みに
姿を變へて馳けつけて來た。權太が最前繩付きにし
て梶原に渡したのは年頃も同じ權太の女房小仙と一
子善太だつたのだ。

かく善心に立ち返つた權太を刺した父親は我が不
明を悔んだ。權太は今までの親不孝のつぐなひに、
我が妻、わが子を血を吐く思ひで繩にかけたのだつ
た。

維盛卿も感じ入り、頼朝への恨みの一と太刀と最
前の陣羽織を刺さんと取り上げると、内ぞ床しき、
内ぞ床しきと古歌の下の句が書いてあつた。何ごと
と縫目を裂いてみると、中には袈裟衣、珠數迄添へ
て入つて居た。

この謎は何だつたらう。

その昔、小松の内府が頼朝の命を助けたことがあ
つたのだ。その恩返しと梶原に命じて維盛の命を助
け、出家させ様と計つた頼朝だつたのである。

權太はこれを聞いて猶ほ悔んだ。たばかつたと思
つた梶原に却つてたばかられたのであつた。

今はの命の權太を後に、維盛卿は高野へ、内侍は
六代君を高雄の文覺へ頼むに、彌左衛門を供に連れ
發足するのでした。

の宿外れで粗末な繪を賣り、細い煙を立て乍らも土佐の苗字を許されたいと精進努力を續けてゐるのでつた。

或る日、又平は女房お徳と共に將監の閑居を訪れ、苗字を許されたいと懇願したが、將監は又平の心を勵まさんが爲め、態と情無くして許すとは云はなかつた。

道々に何やら村人達が立ち騒ぐのを聞けば、この邊りに虎が現はれたと云ふ話。それは狩野元信の畫いた虎の名畫に魂が入つて抜け出したので、將監は弟子の修理之助にそれを鎮めさせ、其の功に依つて又平よりも先きに土佐光澄と名乗らせたと云ふのであつた。

又平は所詮望みは叶へられぬかと、枝では吃に産付けた親を怨んで泣き悲しんだ。

其時、狩野の弟子雅樂之助が血に染まつて駆け込んで來た。そして姫君の危険を知らし助勢を頼む。

將監も心あせつて姫君を助けに修理之助を向はさ

うとする。

又平は、大功あらば土佐の苗字を許すと云ふ將監の言葉に、自分を遣つて呉れと頼むが、將監は許さない。

今は全く絶望した又平は、手近にある手水鉢を石塔と見立て、それに心魂こめて我が繪姿を書き、この場で自害と決心するのだつた。

と、不思議にも又平が念力徹して畫いた繪姿は尺餘の御影石の裏へ通り、兩方から一度に畫いた様に入神の筆勢。それを見た將監も心に感じ、改めて土佐の苗字を許す事になり、姫君救援を許す。

心勇んだ又平は大頭の舞を舞ふ。

庭に下り立つた將監は又平の繪像を畫いた手水鉢を二つに切割り、「舌はもと心の臓、今石面の續を切つて心の臓を立割つたれば、吃る事はあるまい」と云ふので、又平喜んで舌を廻すに少しも吃らず、らりるれる、まみむめも、狸百足棒百本等と早口に云ひ試み、勇みに勇んで出て行くのだつた。



戻り橋の段

八雲	鶴	豊	鶴	鶴	鶴	豊	竹	豊	竹	渡邊源吾綱	扇折若菜 實は悪鬼
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	本	竹	本	竹	竹
寛	仙	友	叶	重	廣	八	本	竹	住	本	本
弘	松	松	太	造	助	十	松	千	太	太	太
			郎			太	島	駒	太	太	夫
						夫	太	太	夫	夫	夫

★夜の部 (十三日より晝の部)

増補大江山

戻り橋の段

本曲は元來「大江山酒呑童子」羅生門の段として上場されてゐたのを、明治卅三年春堀江明樂座で始めて現在の如く戻橋の趣向で上演する事になつたものである。當時、長唄や常磐津で戻橋は市井に流行してゐたのを、人形淨瑠璃の世界にも取り入れることになり、三代團平の節付けで鬼女を伊達時代の故土佐太夫、綱を故大島太夫が語り、幕明きに大薩摩を入れて、これには友松時代の現道八の糸で先頃歿くなつた鍛太夫が語つた云ふ。愛宕山の鬼女が夜々洛中に現れて人を喰ひ夜は往來の人も絶る云ふ或る夜、源頼光の四天王の一人渡邊綱が君の使で堀川戻橋にかゝる扇折若菜と名乗る美女が現れ五條まで綱と道連になつて呉れ頼む。綱は油断なく女と連れ立つて戻橋を渡る時ふと水鏡に映る物凄鬼女の形相、何氣なく女に舞を所望して正體を見せつけ、名刀髭切丸の威徳で遂に鬼女の片腕を斬り落すと云ふ筋です。

(床本) 戻り橋の段

人形役割

渡邊源吾綱 吉田玉徳

郎黨右源太 桐竹紋昇

郎黨左源太 吉田玉男

扇折若菜實は悪鬼 吉田光造

春雨もいつしか晴てしろく、月照渡る堀川の、は
や瀬の流落ち合うて、水音凄き戻橋 扱も渡邊の源吾綱
戻橋へ來たりしが、四方はひっそり静まりて、怪し
みまふ者もなく、むだ足ふみし残念や、一人つぶやき
立居たり、折ふしきつと吹風す、風か有ぬか岸の柳の騒
がしく、心ならればふりかへり、ハテ心得ぬ今吹き風す
夜風の身にしみ、五體の熱氣、扱は妖魔の仕ばさに
て、我をおごさん企みな、いかなる妖魔の術有ることも
それを恐るゝ綱にあらず、イテ妖怪を退治して君へ土産
に參らせん、イザ來い來れと大太刀引きそばめ、木の
下へ忍び入る、又村立ちし雨雲の陰もる月を夜すがに
て、たどる大路に人影も火陰も見えず、我が影を若しや
人かと驚きて、被衣に身をば忍ぶ摺、けふの細布ならず
して女心に胸合はず、思ひ惱みて來りける、ア、今宵の
空の定めなく、降らぬ内にご思へども、爰に一條戻橋、
見れば行きかふ人もなし、ア、便りもなやまた、すみて

暫し休らひ居たりける、綱に小蔭を立ち出で、ア、イ
ヤ女性は何れへ参られるぞ、チ、これは、お武家様、
妾は一條の大宮より五條のわたりへ今宵のうちは非参ら
ればならぬ者、女の身で只一人此の物騒な夜の道、怖い
くさ歩むうち、今のあなたのお聲にて、ほんに惘り致
しました。ホ、怖いさ申すは尤なり、五條のわたりへ参
るさあらば、ア、幸いのよき道連れ、五條のあたりへ用
事も有らば、某送つて遣はそふ、コラお情深い其の仰せ、
お詞に従ひますればどうぞお連れなされて下さりませ、
いざ参らうと打ち連れ立、折しも空の雲暗れて月にあり
く小川の流れ、水に映りし異形の姿、綱は目早く今水
中に映りし蔭は、エ、ア、イヤ夜更けぬ内に早くく
ご、西へ廻りし月の輪に、遠くはなれて愛宕山、北野は
近く清瀧の、森は此方さふりかへり、見上る顔にはら
くご、木々の響も雲運ぶ、又も雨がさ立ち休らひ、綱
は女をいたはりて歩み行く、馴れぬ夜道にてさぞ草臥れ
し事ならん、イエ、妾よりあなたこそ、足弱をお連れ
なされまして、定めしお草臥れでござりませう、ナニサ

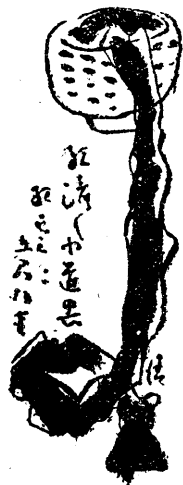
ナニサ最前より見受けし處、ハテ艶かなおこそが姿、連
れ立つ道に馴れやすく、今は隔ても中空も春の名残さ
や、部人さば云ひながら、いさも優しき形風俗、いなこ
ごなたづねれども、おん身が父は何人なるぞ、父は五條
の扇折、常々舞を好みし故、妾も幼き頃よりして教へを
受けしが身の徳にて、此程も或る御所にお宮仕へを致し
ました、ホ、さも有らん、恥かしながら某は、未だ
舞を見たることなし、一トさし舞を見せられまいか、お
送り下さる其御禮に、只今御覽に入れませうが、何を申
すも途中のこと、拙なき技とお叱りは、モ只幾重にもご
一禮し、女性は扇借り受けて、會釋をこぼし進み出で、
空も霞みて八重一重、櫻狩する諸人が、群つゝ妾へ清水
や、初瀬の山に雪さ見し、花の散り行く嵐山、惜しむ別
れの春過ぎて、夏の初めにおくれにし、花も青葉に衣更
へ、木々の翠の美もや、テサテ面白き事なりしぞ、か、
る伎藝のある者を、妻に持ちなばよき楽しみ、春の夜道
に結ぶ縁、解くか解かぬかおこそが心只一ツ、コレサご
うか、ご寄り添へば、女ははつと袖覆ひ、お戯れさば

知りながら、嘘にも嬉しいその仰せ。定めて貴方は奥様をお持ちなされてござりませふ、ア、イヤ、未だ妻はめさらぬが、見らるゝ通りの武骨者、誰れも妻になり人がない、なんのまアない事がござりませふ、まさゝゝとしたそのお顔、お情深きお心に、今宵見へし妾さへ、縁を結ぶ露もがな、思ふ戀路の初盤、云ひ出しかれて胸こがし、若葉の闇に迷ふもの、都女郎は取分けて、妾優しき花菖蒲、引きつ引かれつ澤水に、袖も濡にし事やらん、こなたは尙もうち解けて、それは御身の思ひ違ひ、かゝる名もなき田舎武士、思ひをかける者があらうか、イエ、知つて居ります立派なお名前、ム、何立派な名前さば、當時内裏を守りの役、都へ上りし頼光朝臣の御内にて、渡渉源吾綱ごのこ、ム、如何致して我が名をば、サア戀しと思ふ殿御故、さくより存じて居りまする、戀しく思ふと云ふは偽り、御身が我が名を存ぜしは妖魔の術で有ふがな、ム、チホ、又悔りさそふと思ふて、アノマア眞顔でコレ申し御覽の通り私は若菜、エ、しらん、しくもぬかじたり、汝は心づかさざりしが、長前

これへ来る道すぢ、月の光に有り、さ水に映りし鬼形の姿、なんさハ、媚よき女に化ける共、其本性は悪鬼ならん、ム、サア斯く見ぬきし上からは、其本性を現はすか、サア、君より賜はる此御太刀、髯切丸の利劍の切味、すみやかに降伏さそうか、サア、サア、サア、サア、サア、源の頼光が家臣渡邊の源吾綱が向ふたり、變化の正體現はせよと、柄に手をかけ詰めかけたり、此方の妖女は忽ちに、憤怒の相を現はして、次第々々に變ずる姿、眼いからし大音聲、我は磐岩の山奥に幾年住みし悪鬼也、斯く見現はされし上からは、我が隠れ家へ連れ行きて、引き裂きくれんいざ來いと、云ふより早く飛びかゝり、綱が襟がみむんすご掴み、引き立て行かんその有様、ナニこしやくなりさふり放す、又も掴みし強魔の力、此方は動かぬ金剛力、引きつ、引かるゝ時しもあれ、一天俄にかき曇り、震動なして四方より黒雲覆ひ重りて、砂石を飛す暴風に連れて虚空へ引き上れば、あやしかりける次第なり。

父は唐土
母は日本
國性爺合戰

樓門の段
獅子ヶ城の段



樓門の段

竹本 南部 太夫
鶴澤 寛治 郎
竹本 伊達 太夫
野澤 喜左衛門

獅子ヶ城の段

切豊竹古鞆太夫
鶴澤清六

支那の明朝が亡び、その遺臣鄭芝龍（老一官）は日本に亡命し、九州平戸の武士田川氏の娘を娶つて一子鄭成功（和唐内）を生んだ。後父子は故國に歸へり明帝を推し、東寧（臺灣）に據つて清朝に反旗に翻した。そして鄭芝龍は我が徳川幕府に援兵を乞ふたのが正保三年の事で、紀州の頼宣卿等が熱心な出兵論者もあつたが、幕府は遂に不可と決定した。その年、芝龍は清朝に降つたが、成功は従はず、寛文二年五月臺灣に卒すまで清朝に反抗を續けた。（成功の死後は、更にその子鄭經及び孫の克挾まで三代に亘つてその意志を繼いだが我が天和三年七月遂に臺灣は清朝に歸した）この鄭成功即ち延平王國性爺を材とした淨瑠璃は「國仙野手柄日記」として元禄十三年末頃に錦文流によつて作られてゐるが、正徳五年十一月大阪竹本座で「國性爺

人形役割割

樓門の段

錦 祥 女 吉田 榮三郎
 和 藤 内 母 吉田 文五郎
 和 藤 内 官 吉田 小市
 老 一 官 吉田 兵吉
 軍 し 兵 大 ぜ い
 こ し 元 大 ぜ い

獅子ヶ城の段

和 藤 内 母 吉田 文五郎
 錦 祥 女 吉田 榮三郎
 吾 甘 輝 吉田 玉助
 和 藤 内 吉田 玉市
 こ し 元 大 ぜ い
 軍 し 兵 大 ぜ い

合戦」全五段が近松門左衛門の雄筆によつて舞台にかけられる事になつた。當時の民衆に目新しい唐風を舞台に寫し、さにかく際物としての興味以上に時人の耳目を聳動さす事件であつた事や、支那人と比較して義に勇み、武勇に勝れた日本人を舞台に活躍させた事などから、三年越し十七ヶ月間打通す云ふ未曾有の大當りを取つた。そして享保二年二月には引續き同座に、近松自身は「國性爺後日合戦」を出した程だつた。

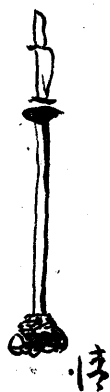
梗概

明朝思宗皇帝の時、右將軍李踏天が韃靼に内通して其軍勢を引入れて王城を陥れ、皇帝を弑した。大司馬將軍吳三桂は亂軍中に我が兒を犠牲にして幼い太子を助け、之を奉じて九仙山に隠れた。皇妹梅檀皇女は辛じて船で敵手を遁れて日本の平戸に漂着し、舊臣鄭芝龍老一官の子和藤内に救はれた。老一官は帝を諫めたが用ひられなかつたので亡命して日



本に渡り、日本人を妻として和藤内を生み、既に廿餘年を過したのであつた。然るに今皇妹から祖國の難を聞くや、妻と和藤内とを伴ひ本國に渡り、明朝の再興を企て、韃靼の大將伍將軍甘輝を味方に頼みに行く、甘輝は老一官が先妻との間に設け、二才の折に別れた娘錦祥女の婿である。その甘輝の居城、獅子ヶ城の樓門に一官夫婦に和藤内の三人が辿り着いたが、要塞堅固で入れず、また懐しい父や義母、義弟に廻り遇へたと云ふものゝ控きびしく、錦祥女は義と恩愛の枷にかゝつて苦しむ、そして繩つきでなら言ひ譯けも立たうと、一官の老妻が獨り繩にかゝつたまゝ城内に入つて行く——夫甘輝を味方にするその吉左右の報は川に流す白粉は上首尾、もし紅なれば不首尾と思へと合圖を定めて……。繩つきのまゝ城内に入つた和藤内の母は、錦祥女と共に甘輝に親兄弟の忠誠に與させようと説いたが韃靼王にも

義理のある甘輝は仲々に承諾しない。一方門外に合圖を待ちあぐむ老一官と和藤内。南無三寶。折柄流れて來たは紅の水、さてこそ味方もせぬ甘輝奴に母は預け置かれずと、和藤内は城内へ亂入する。その紅は錦祥女が自ら胸を抉つての血潮で、死を以つて夫を諫めたのであつた、そして母も娘のあとを追つて自害する。遺の甘輝もこの兩人の貞烈に動かされて和藤内に味方し、明の再興に努力する事になる。和藤内は延平王國性爺鄭成功と號し韃靼軍を撃破して李踏天を屠り、九仙山なる太子を迎へて明朝を再興し國性爺の武名を顯す。





壺坂觀音靈驗記

澤市内より壺坂寺の段まで

澤市内の段

竹本 七五三太夫
鶴澤 綱造

壺坂寺の段

竹本 相生太夫
野澤 吉五郎
鶴澤 友五郎
豊澤 猿二郎

人形役割割

澤市内の段

女座 房頭 澤市 吉田 政榮 三龜

壺坂寺の段

女座 房頭 澤市 吉田 政榮 三龜
世お澤 音里市 吉田 政榮 龜夫

この「壺坂」は「良辨杉」等と同じく、名人豊澤圓平とその妻加古千賀との夫婦の協力によつて生れた明治時代の新作浄瑠璃中、最も人口に膾炙した曲である。元來この「壺坂」は「西國卅三所觀音靈場記」と呼ぶ各寺一段の形式をもつ作者不詳の合作物の中の一役の中に當るもので、恐らく西國第六番の札所大和壺坂寺に流布してゐる縁起に加筆した程度のものが台本となつてゐたらしく、それを更に千賀女が補筆改作して成つたものが現在の「壺坂」で、作品として構成は至極單純。これに夫の圓平が節付けして始めて「壺坂」、正しくは「卅三所花の山壺坂靈驗記」が生れた。但し圓平の節付けも今日の「壺坂」に大成するまでには前後二段の改訂を経てゐた。最初、千賀女の加筆した「壺坂」に節付けしたものを床にかけたのは島大夫で、明治十二年十二月十月大阪大江橋の席であつた。それを受けて二度目に名人住大夫（越太夫時代）が語つたが、一時中絶した。後、三代目大隅大夫が更にそれを傳承して、明治廿年二月

十日から稻荷の彦六座で團平自らの糸で語るこゝになつたが、この時團平は前の節付けを全然改めて今の様なグツミ派手で流麗巧緻なものにしてしまつた。斯うして俄然人氣に投じ、流行を極はめ、一般化されて今日に至つた。

梗概

大和國壺坂寺の片邊りに澤市と云ふ座頭が住んで居た。女房のお里は座頭の妻には惜しい程美しいと云つて近所でも評判だつた、それが盲目の澤市には秘かにねたましかつた。それにお里と夫婦になつて丸三年、毎夜七ツの鐘が鳴るとそつと家を抜け出して行くお里が不審でならなかつた。誰かお里が思ひを通はず男があるに相違ないと澤市は思つてゐた。然し、盲目の自分の身を考へるとき、僻みさへ加はつて、いつそ黙つて居やうとも考へた。

とある夕方である。澤市はいら／＼する胸をしづめて、遺る瀬ない三味線を弾いてゐた。

「鳥のこゑ、鐘の音さへ身にしみて思ひ出す程なみ

だが先へ落ちて流るゝ妹脊の川を……」

澤市は自分でこの唄がかなしかつた。

めづらしく三味線などを弾いてゐる夫の姿がお里には機嫌よく見えなくもなかつた。お里がそんなことを云ひ出すのが澤市は心外だつた。いつそのことお里に云つてしまはう。澤市はさう決心した。そして今迄不審に思つて居た事などを怒りの聲さへ交へて語つたのだつた。

それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたとは云ひ乍ら、夫の言ひ分が自分の心に引き較べてあんまりなのに泣きくづれた。

譯はかうだつた。澤市とお里は従兄妹同志一緒に育てられた仲だつた。その中に澤市は痲瘡にかゝつて眼までつぶれてしまつた。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働いた。そして澤市の眼病平癒のため、この三年の間と云ふもの雨の夜も雪の夜も壺坂の観音へ跣足詣りをつゞけて居たのだつた。

それと解つてみると、澤市は貞節な妻の前に自分

がならべた邪推がはづかしかった。そしてお里に泣いて詫びるのだつた。

すべてを打開けたお里は、澤市の心を引立て、一緒に観音へ参詣してみたら、とも云つた。腑甲斐ない自分をさうまで云つて呉れる女房に對しても、眼が開くものなら開きたいと澤市は思はないでは居られなかつた。

何時の間にか夜になつた。お里に手を取られた澤市は、険しい坂道をやつとのこと、壺坂の観音堂まで辿りついた。二人はつゝまじやかに西國六番の札所此處壺坂観音の御寺に頼づいて御詠歌を上げた。

この眼が癒るものか、癒らぬものか三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里をその仕度にかへ歸してしまつた。然し澤市はもう決心して居たのだ。あの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても所詮は治ることのない業病、いつそひと思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのである。

杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市だつた。

一人残して来た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつてみると夫の姿は見えない。呼べど叫けべど松風と谷の音ばかり。お里は狂氣の様に澤市の行方を尋ねた。ふと見ると崖の上につき立てた見覚えのある夫の杖、はるか谷底を見やれば、さす月光にあり／＼と澤市の姿さへ見えるのだ。夫澤市を失つてお里はどうして生きて居る甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて谷間へ身を投げたのであつた。

やがて夜が明けかゝる頃、谷間に横はつた澤市お里の死骸には夜明けの風がつめたくあつた。

何處からともなくかほる靈香、妙なる音楽につれあり／＼と姿を現じ給ふたのは壺坂の観世音だつた。観世音は澤市、澤市、お里、お里と二人を呼びさますのだ。二人は眠りから覺めた様に眼を開いた。

お里の貞心に佛も感じ、二人の命を救つたのである。さう云へば澤市の眼も開いて居た。観世音は、三十ヶ所の靈場を巡禮して佛恩に報ひよと云ひ残して姿を消してしまつた。

二人の喜びは何にたとへ様も無かつた。たゞ相抱いて躍り狂ふ二人だつた。

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

○竹本座 創立(現今ヨリ二百五十九年以前)
 貞享元年二月(道頓堀西ノ芝居)

○文樂座 發祥(現今ヨリ約百五十年以前)
 天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
 文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横掘新築地濱時代
 天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
 安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
 明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
 明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
 明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
 大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
 昭和元年ヨリ昭和四年マテ道頓堀辨天座ヲ始
 メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
 昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を
 賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆縁御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一体の人情
 淨瑠璃の日本唯一の公演場でございます

文樂座人形淨瑠璃は 昔に大阪の誇りとする舞台藝術のみならず我日本に於
 ける古典舞台藝術の至寶として世界に誇るべきものであります、従つて開
 演毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆縁の御期待に背かぬ様、皆縁に
 御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの
 点は御客様の御聲として承りたく存じます。

貴重品は 各自にお持ち下さい、お座席お立ちのときは御携帶を願ひます。
 お煙草は 一階、二階座下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處で
 お願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店 は 一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に
 御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶対に致しません。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。
 御辨當御持參の御方は何卒御利用下さい。

出演者 病氣其他の事故にて出場不能の場合は乍勝手代役にて相勤めますれ
 ば右様め御諒承を願ひます。

松竹株式會社 文樂座

支配人 大橋照夫

電話南(7) 三〇三二 三〇三二
 三七七八 三七七八
 四七一 四七一

日七廿月五

輝く第三十九回

海軍記念日

海を忘れて国防なし

